

平成30年10月10日

市原里づくりの会 山越国臣

## ふるさと市原を考える

【はじめに】市原市の誇る歴史・文化遺産の次世代への継承を目的に、地域の"語り部"たちが集う「ふるさと市原をつなぐ連絡会」が始動。会員間の情報交換、おらがムラの自慢話などの発表を通じて、さらなる市原の魅力を探るのがねらいです。きょうは、「ふるさと市原を考える」をテーマに、わたしが生まれ育った市原地区について、自己紹介を兼ねて語りたいと思います。千葉日報の新聞記者として、現役時代は県内各地取材してきました。市原市との縁は30年前の市原支局時代。取材活動を通して故郷の素晴らしさを知ることになりました。取材の中で「お住まいはどちら」と聞かれ、「市原です」と答えると、「市原のどちら?」と返されるのが常でした。「市原」という地区(大字)があることを知らない市民が多い。「市原」の存在を伝えたいという思いから、リタイア後に市原里づくりの会を立ち上げ、活動しています。併せて古代の市原にも興味があり、「まぼろしの上総国府」を追求しています。ふだん何気なく使っている「市原」という言葉。地名の語源・由来はなんだろうか。市原地区の紹介。ライフワークとなりそうな「上総国府の研究(私論)」についてが主な内容です。

### ●市原の地名について

「市原」のイチハラという語源はどこに由来?現在は二通りの意見(説)があるようです。一つは「櫟原(いちいはら)説。郷土史家の田中喜作さんは、労作「市原の地名」(市原地方史研究第18号)で市原の地名由来にふれ、「現在の大字『市原』は、古代市原の中心地と推定され、古い歴史を持っている」と、したうえで「日本地理志料」(明治40年・郵岡良弼著)のなかに「山城の国にも櫟原があつてイチハラとよんでいるから、当市原も櫟原ではないか。イチイの木(イチイガシ)が多く茂っていたから」と、他の郷土史家が唱えた説に賛意を示しています。確かに、現在も京都・洛北の私鉄沿線に市原という地名、駅がありますが、櫟原が市原になったのは鎌倉時代らしい。二説目は、門前地区に人市場という字名が残ることに注目した「国符市庭」説。国の親市である一日市場(ひといちば)から派生し、中心的な市が開かれた広場(原)があった。「人市場」について、考古学が専門で古代市原の歴史に詳しい宮本敬一さんの見解です(八幡公民館主催講座「上総国府再考・上総国府の所在地―地名から考える―」)。人市場地区に「姥(うば)神」という祠があり、市場の繁栄・守護する神社だったという。私論を述べると「一日市場」説を採りたい。現在も姥神さまを起点に、南北に百衄以上の広い古道が走っています。上総国府跡の推定地に近い門前・郡本地区と市原地区に隣接。その道の両側で、さまざまな店が軒を連ね、活気を見せていたのだ

ろう。また、人市場説は、「上総国府の研究」という論考を残し、強く市原説を唱えた郷土

## 1

史家の鴫田恵吉さんも指摘しています。

### ●市原地区について

「市原」は市原市発祥の地。JR 内房線八幡宿駅から南東約 2 ㎞の台地上にあります。市原台地の北端に位置。最近では、有名な鮮魚店「古清」がある所と言ったほうが分かりやすいかもしれません。地区内には、八幡地区の国府総社・飯香岡八幡宮の元宮といわれる市原八幡神社、万葉集にも登場する阿須波神社、上総国分寺の同范瓦や独自の范を持った瓦が表採され、注目されている光善寺（光善寺廃寺遺跡）などがあります。寺の境内・薬師堂前には、県内最古の室町時代の作風を残す石灯ろう（市原市指定有形文化財）が建立。市原八幡神社は市原市市原 1 番地に建ち、同市の一丁目一番地。中でも、わたしたちの自慢は、「市原の柳楯神事」（千葉県指定無形民俗文化財）です。市原地区で調製された「柳楯」が、飯香岡八幡宮に届かないと例大祭、みこしの渡御ができないという特殊神事。さきごろ、千葉県が 2020 年の東京五輪・パラリンピックに際して、千葉の魅力を内外に発信しようと設けた「ちば文化資産」（111 件）に登録されました。ちなみに市原市は 3 件でした。

### ●私論「なぞの上総国府」について

上総国府はどこにあったのだろうか。上総国分寺・尼寺跡が市原市内にあるのだから、その周辺にあったことは全国の事例からみて確か。現在は、①市原②郡本・門前③能満④村上一の四地区に集約されています。有力だった惣社説は、国分寺台区画整理事業の発掘調査で確認できませんでした。わたしは、「上総国府」研究に寺社配置に注目。考古の成果も加味し、独自の視点から追い求めました。時間的制約もあるので、結論を先に言うと、国府域は能満台地を含めた市原台地を有効に活用。国衙（国庁）が「古甲」の字名がある郡本・門前地区→市原地区→能満地区と、時代とともに移ったという移転説が私論です。村上説については、昨今の雨台風などの川のはんらん。養老川に近いリスクの高い村上に重要拠点をおいたのだろうか。地元ひいきですが、四神相応の地・市原がふさわしい。俯瞰（ふかん）してみると、市原地区は周囲を神社で守護されています。考古学的にも、地区内で古代官道（国道）、重要官衙跡、市内で最大の柱穴跡、区画溝らしき遺構などが確認されています。国分寺・尼寺の中心軸が A 期、B 期とずれるのは、国衙（国庁）が移転したことを示しているのかもしれませんが。詳しくは房総古代道研究会会誌「房総古代道研究（一）」に論考を寄せていますので、一読くだされば幸いです。講座の資料として、わたしの描いた小径（こみち）から見た図説「上総国府」を添えています。

### 【終わりに】

わたしの好きな言葉に「温故知新」があります。昔のことを学び、訪ね、新しきものを創造する。最近では「チバニアン」が加わるなど市原市内は歴史・文化遺産の宝庫です。地域の活性化を図るには、市民・地域社会全体での価値共有が欠かせません。今後は、どれだけ市内の「宝物」を見つけ出せるか。「市原市まるごとミュージアム」事業成功のカギを握っていま

す。母なる養老川、国境の村田川（境川）を縦糸、各地の資産を横糸にして、みなさんで素敵な絵柄に織り込んでいきましょう。